子どもの発言力を引き出す授業の創造
ー古文「平家物語 扇の的」の授業実践を通してー

教職実践研究科　教職実践専攻　教職実践基礎領域
安藤　光一

Ⅰ　はじめに

1 教職大学院進学理由

教職大学院に進学した大きな理由は学校サポーター活動や、教師力向上実習をとおしての長期的な実習を経験することができることに魅力を感じたからである。みよし市立三好中学校で約1年半、継続的に生徒とふれあい、さまざまな実習をさせていただいたことで、学部時代では十分に学ぶことのできなかった、児童生徒への接し方や支援・指導方法、授業づくり、学級づくりで大切なことを生徒とのふれあいの中で学ぶことができた。

2 伝統文化　古典教育について

平成20年3月に告示された新学習指導要領で新しい国語教育の方向性が掲げられた。その一環として、古典教育の充実が掲げられている。

現在、急速な欧米化により日本人が築いてきた伝統、情緒、風習などの価値あるものが失われつつある。今後は我が国の文化に対しもう一度目を向け、これまでの文化を継承し、発展させ、グローバル時代に対応した子どもを育成していかなければならないという背景が古典教育の充実の背景にある。

新学習指導要領では、古典教育の充実における方針として、次の2点が具体的に示されている。

1つ目は、従来の〔言語事項〕に代わり、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設されたことである。〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕は「伝統的な言語文化に関する事項」「言葉の特徴やきまりに関する事項」「書写に関する事項」で構成されている。古典教育については「伝統的な言語文化に関する事項」において、指導すべき内容が述べられている。これまで、あくまでも古典指導は、「読むこと」の領域の指導事項でしかなかったが、「伝統的な言語文化に関する事項」の新設により、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域を通してより広い視野から指導していくことが示された。

2つ目は、「伝統的な言語文化に関する事項」が小学校低学年から設けられたことである。新学習指導要領では「伝統的な言語文化」の対象として「昔話や神話、伝承など」（小1・2年）、「易しい文語調の短歌や俳句」「ことわざや慣用句、故事成語」（小3・4年）、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章」「古典について解説した文章」（小5・6年）等が提示されている。今後は、小学校から古文の指導が行われることとなり、中学校での指導内容の一部が小学校でも指導されていくことになる。つまり、今後は小学校段階から様々な古典指導を行い小学校低学年から中学校まで9年間をかけた系統的な古典指導の構造がつくられていくことになったといえる。

Ⅱ　テーマ設定の理由

多くの生徒が意欲的に発言をし、互いの考えを共有しながら話し合い、学びを深める授業場面をつくりだすことは容易なことではない。かといって、教師が一方的に知識を注入し、生徒が受身になってしまう授業では意欲的な学びにはつながらない。

そもそも、子どもたちが授業中に「発言してみようかな。」「自分の意見を伝えたい。」と思えるような授業とはどのようなものだろうか。

生徒それぞれが自己肯定感を抱いていたり、集団に対して安心感を抱いたりしなければ、「発言したい」とはなかなか思えないのではないか。これらの感情を生徒が抱くためには、**より良い学級集団を形成する**という側面と、**楽しく意欲的に取り組める授業を形成する**という側面が必要である。

実習を行わせていただいたみよし市立三好中学校（以下、実習校）は、豊かな自然環境と自動車関連産業をはじめとした多くの企業が立地した中にある学校である。生徒は、先生方の連携した熱心な指導により、互いに切磋琢磨しながら学校生活を送っており、部活動や課外活動に対しても積極的に取り組んでいる。

約1年半実習させていただいた2年1組の生徒たちは活発的な者が多い。また相手の話や教師からの指導を真面目に聞き、素直に受け入れようとする者が多い。

しかし、授業中の発言意欲やその内容に注目してみると、特定の生徒だけの挙手や発言、音読や既習事項を確認する時のみ発言率が高まるなどの状態に陥りがちであった。さらに古典学習ともなると、どうしても苦手意識が先行してしまい、古典の授業を行うことを伝えただけで、嫌悪感を表してしまう生徒もいた。

今後ますます重要になる古典学習において、生徒が主体的に学習に取り組める方法・工夫を考える必要がある。本実践では、みよし市立三好中学校で実習させていただいた古文『扇の的ー「平家物語から」ー（光村図書　中学2年）』の授業を中心に、

より良い集団づくりをとおして発言力を引き出すために必要な方法について述べていきたい。

Ⅲ　教材について―平家物語への想い―

古典を学ぶことは、当時の人々の生き方や考え方にふれることである。蔭山江梨子氏は『平家物語』「扇の的」の授業化について，以下のように述べている（注 1）。

『平家物語』は貴族から武士の時代へと移り変わる時代の転換点を、史実と虚構を織り交ぜながら描いている。新しい価値観に翻弄されながら死に向き合わざるをえない平家と、厳しく追い詰める新興勢力としての源氏が、極限状態で人間らしい姿を発揮するところにこの作品の魅力やドラマがある。それゆえ、知らない世界に一歩踏み入れたいという思いを生徒たちにもたせることができる題材である。

生徒たちは 1 年生で古典（『竹取物語』等）を既に学んでいる。そのため、本単元を通してさらに古典に深く接し、より親しんでいくことができると考えられる。2 年生では、『平家物語』を中心に、より深く古人の生き方や考え方に思いを巡らせたい。

しかし、生徒たちの中には古典に対して苦手意識や嫌悪感を抱く生徒も少なくない。そこで、古典の基礎的な知識をもう一度正確に復習する時間を準備し、場面や意味のまとまりを意識させ、人物・情景描写や会話等を考えさせながら音読させたり、発言意欲を高めるために、自分の思いを班内で発表させる時間を用意し自信をもたせたりすることで、古文への苦手意識を減らし、楽しく学習できるようにしたい。

さらに、与一の心情や当時の人々の生き方、考え方を探るにあたり、次のような指導を行っていきたい。

現代語訳を積極的に読ませたり、当時の常識的価値観や考え方を紹介したりすることで、より親しみをもって学習できるようにする。

班での話し合いを通し、登場人物の心情や立場について考え、意見をまとめる。

以上のことから、与一をはじめとする登場人物のそれぞれの生き方や考え方を、時代の価値観とともに考え、気付かせていきたい。

Ⅳ　目標と手立て

1 古典へのリテラシーを高める授業改善

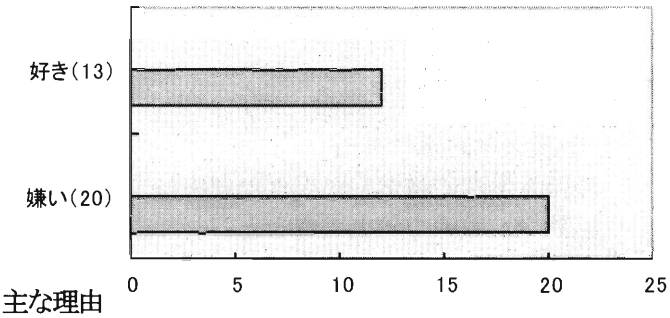
手立て(1) アンケート結果から見える子どもの課題

生徒が古典に対してどういった考えをもっているのか、事前にアンケートを取り、生徒がどういったことで嫌悪感をもつのかを調べる。

実際に、実習させていただいた 2 年 1 組（男子 15 名　女子 18 名　合計 33 名 ）の生徒たちに、以下の項目で平成 23 年度 10 月にアンケート調査を行った。

古典は好きですか？嫌いですか？

○好き（13 名 約 39%）　●嫌い（20 名 約 61%）

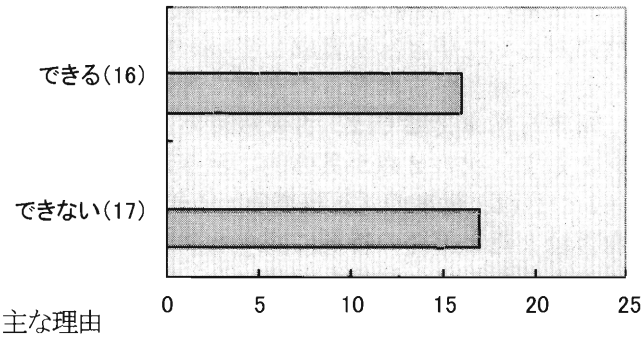


■主な理由

	アンケートからの意見
古典が好き	普通の文字ではないところがおもしろい。 歴史が好きなので、古典にも取り組みやすい。 昔の言葉に興味があった。
古典が嫌い	読むことに抵抗がある。 歴史的仮名遣いに苦手意識がある。 なんとなく難しいと感じてしまう。

古典の授業で意欲的に発言できますか？

○できる（16 名 約 48%）　●できない（17 名 約 52%）

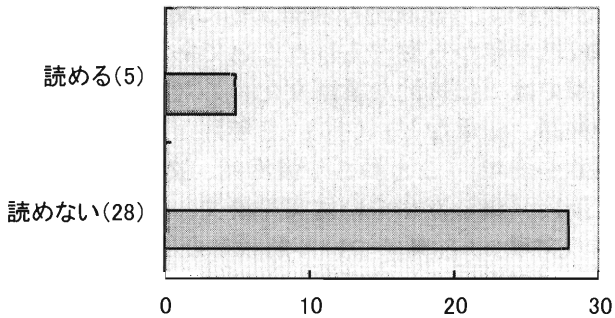


■主な理由

	アンケートからの意見
意欲的に発言できる。	言葉の意味などは積極的に発言できる。 音読やノートに書いたことならできる。
意欲的に発言できない。	内容をつかむのが苦手で発言できない。 わかっていても、自分からはなかなか発言できない。

原文をすらすらと読めますか？

○読める（5 名 約 15%）　●読めない（28 名 約 75%）



■主な理由

	アンケートからの意見
すらすらと読めない。	発音や読みにあやふやなところがある。 漢字が多いので、積極的に読めない。 独特のリズムに慣れていない。 現代仮名遣いに直すのが苦手。 言葉の読みや意味に、苦手意識がある。

アンケートを元に、目の前の生徒が抱く古典に対する気持ちの実態と考察を以下にまとめた。

アンケート調査からわかる生徒の実態

①古典が好きだという生徒は全体の約39%、古典の授業で意欲的に発言できる生徒は全体の約48%、原文をすらすらと読める生徒は全体の約15%であった。

どの設問も全体の過半数を割っていた。軒並み音読に対しての数値が15%と低く、具体的には、「大きな声で読めない。」「リズムに慣れ親しめない。」といった音読に対して自信を持てない生徒が多い。

②古典が嫌いだという生徒の意見のなかには、「読むことに抵抗がある。」や「歴史的仮名遣いが嫌い。」といった読みに対する嫌悪感をもつ生徒が多い。

③意欲的に発言できないとする生徒のなかには、古文の内容が理解できないことで苦手意識をもち、発表できない場合と、個人的な性格などが影響して発表することが苦手である場合がある。

アンケート調査をもとにした考察

苦手意識を持つ生徒の多くが、目の前の古文が読めないことをきっかけに、つまずいてしまう場合が多い。歴史的仮名遣いに嫌悪感を抱いている生徒は少なくない。そこから古典に苦手意識をもち始めてしまう可能性が高い。従って、第1学年から基礎的な知識の習得を徹底的に行う必要性がある。また、独特な発音や七・五調のリズムに関しては、小学校段階から慣れ親しませていきたい。

アンケート調査から、「歴史的仮名遣いの理解が不十分である。」ことと、「音読の際に生徒が特に気にすることが、発音とリズムである。」ことがわかった。

これらの実態と考察をもとに、生徒が古典に慣れ親しんでいくためには、抵抗感なく古文を読めるようになる必要がある。

そのためには、第1に古典を読む際に必要な基礎知識の復習をしっかりと行うこと、第二に、生徒が音読練習できる機会を授業中により多く設ける必要性がある。抵抗感なく読むことで、その時代の状況把握や登場人物の心情理解にもより意欲的になれ、発言しようとする気持ちにもつながってくるはずである。また、『平家物語』の時代背景を主体的に学ばせることでより円滑な内容理解を促し、意欲的な発言につなげたい。

手立て (2) 古典の基礎知識と歴史的仮名遣いの理解

古典の基礎知識が曖昧であったり、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直せないことで、古典に対して苦手意識をもったり、音読につまずいてしまったりする生徒が多いことがアンケート調査からわかった。

生徒が積極的な音読をとおして、「古典に慣れ親しむ」ためには、前提として生徒それぞれが古典の基礎知識と歴史的仮名遣いを理解しておかなければならない。

実習校にて行わせていただいた、授業単元『扇の的－「平家物語から」－（光村図書　中学2年)』では、一時間目に、スキル学習として2つの項目に重点を置いて授業を行なった。

①古文の基礎知識の復習

生徒は、第1学年の段階で古典の基礎知識について既に学習している。実習校では、古典の基礎知識がまとめられている学習プリント（図表1）が第1学年の段階で用意されており、3年間を通して活用できるように、便覧の裏表紙に貼らせておくという工夫がなされていた。これにより、生徒は昨年の自分自身の学習を思い出し、振り返ることができる。また、単に知識を問うだけでなく、歴史的仮名遣いの原則が説明できる生徒に、実際に他の生徒の前で説明させるなど、生徒が活躍できる場面を多くつくるようにした。まずは、この基礎知識の再確認を行う。

(図表1)　古文 基礎知識の学習プリント一例

古文の仮名遣いについて

1古文の文章（文語）
・平安時代の話しことばの発音に基づく。「歴史的仮名遣い」

2今日の文章（口語）
・現代の話しことばの発音に基づく。「現代かなづかい」

歴史的仮名遣いの原則

〈第一原則〉
・語の初めでないところにある。
「は・ひ・ふ・へ・ほ」
←
「ワ・イ・ウ・エ・オ」となる。
例　あはれ→あワれ

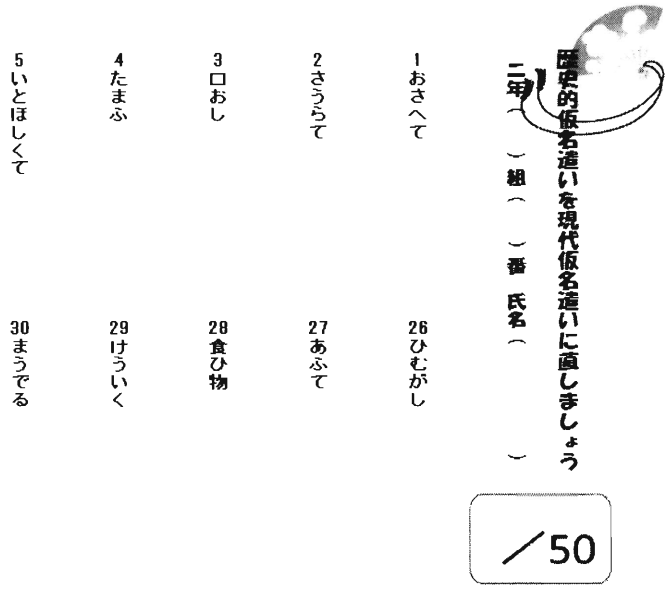
〈第二原則〉
・ローマ字で判断する。
「あう au」「いう iu」「えう eu」「おう ou」
←
「オー（ô」「ユー（yu」「ヨー（yo」「オー（ô

②歴史的仮名遣いプリントの活用

①と同様に、第1学年で1度解答したことのある歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す小テスト50問を約10分間行った。ほぼ完答している生徒と、空白が目立つ生徒に二極化していた。完答していた生徒は「去年と同じだから大体覚えている。」と述べており、個人差をできる限りなくすためにも、第1学年の段階で徹底的に歴史的仮名遣いの練習をしておく必要があることを再認識した。

小テスト後は、端の生徒から順番に「なぜ、そのような読み方をしたのか」を歴史的仮名遣いの原則と照らし合わさせながら、説明をさせ、答え合わせを行なった。

(図表 2) 歴史的仮名遣いプリント一例


歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直しましょう
二年（　）組（　）番　氏名（　　）
1おさへて
2さううらて
3口おし
4たまふ
5いとほしくて
26ひむがし
27あふて
28食ひ物
29けういく
30まうでる
／50

↑問題と問題の間のスペースを多めにとり、生徒が歴史的仮名遣いの原則を書き込みながら学習できるようにする。空白の多い生徒には、机間指導の際に歴史的仮名遣いのどの原則が必要かを考えさせ、書かせるようにした。

手立て (3) 音読指導の工夫

音読の練習を毎時間毎に行うよう心がけ、「読むこと」に対して抵抗感をなくすことが大切だが、その際に生徒全員を立たせて教師の範読の後に生徒に読ませるといったワンパターンだと、生徒の意欲は確実に下がりがちである。生徒の読みの到達度を把握しながら、授業毎に工夫する必要がある。以下に具体例を示す。

(図表 2)　音読指導の段階表

到達段階	支援方法 （発音・声量・リズム・姿勢などに注目し適宜指導する。）
段階Ⅰ 教師の範読に続いて、生徒に読みの練習を行わせる。	①教科書を持つ姿勢は正しいか。全体への指導と机間指導をしながらの個別指導を行う。 ②発音や七五調のリズムは正しく読めているか。読めていなければ、その場でもう一度読ませる。
段階Ⅱ 男女別に読ませたり、列毎に読ませたり互いの音読を意識させる。	①順番に読ませる際に、単調にならないように、交代させるタイミングをバラバラにする。（＝生徒が常に本文に集中できる状態にしておく。） ②男女別で読んだ際に、互いの良い点と悪い点を指摘させ、読みを振り返らせる。 ③他の生徒の読み方を聞きながら、周りに合わせて読ませる。 ④生徒が自分の力で読んでいけるように、教師は範読する回数や部分を少しずつ減らしていく。生徒がつまずく部分や登場人物の心情の部分だけ読むなど、メリハリをつける。
段階Ⅲ 生徒一人で読ませる。意識を集中させる。	①人物の心情や場面を思い浮かべながら読むように指導する。 ②登場人物の心情を正しく理解して、音読できているかを確認する。

生徒の様子を観察しながら、音読の指導は適宜工夫していく必要がある。個人なのか、集団なのか、授業に意識を集中させたいのか、気持ちを切り替えさせたいのか、落ち着いて音読をさせたいのかなど、その場に合わせた音読が必要である。

手立て (4)　生徒主体の時代背景の理解

平家物語を学習していく際に、平家物語の根底に流れている価値観や、成立時代など、内容理解の前におさえておきたい時代背景の知識がある。

(図表 3) おさえたい知識の一例

①軍記物語であること。②成立時代（鎌倉時代初期）③作者は誰か。④語り手の存在。⑤平曲について。⑥平家と源氏の戦いであること。⑦その戦いが約 50 年続いたこと。⑧栄枯盛衰とは。⑨無常観とはなにか。⑨和漢混交文で描かれていること。

これらの知識を学習する際に、知識注入型の一方的な授業にしてしまうのでなく、生徒の口から平家物語の知識を発言させ、板書をする。以下その手順。

①事前に平家物語についてどんなことでも良いから調べてくるように課題を出しておく。
②授業中も平家物語について教科書や便覧、あるいは国語辞典などを使ったりしながら平家物語について調べさせる。
③調べてきたことや、新しく発見したことを順に発表させ、板書をしていく。似たような意見でも板書をし、できるだけ多くの生徒の意見を反映させ、生徒の発言意欲の高まりにつなげる。この時、おさえたい知識が生徒の発言としてなかなか出てこない場合は、ヒントを出してその知識について生徒が調べ、発表できるようにする。

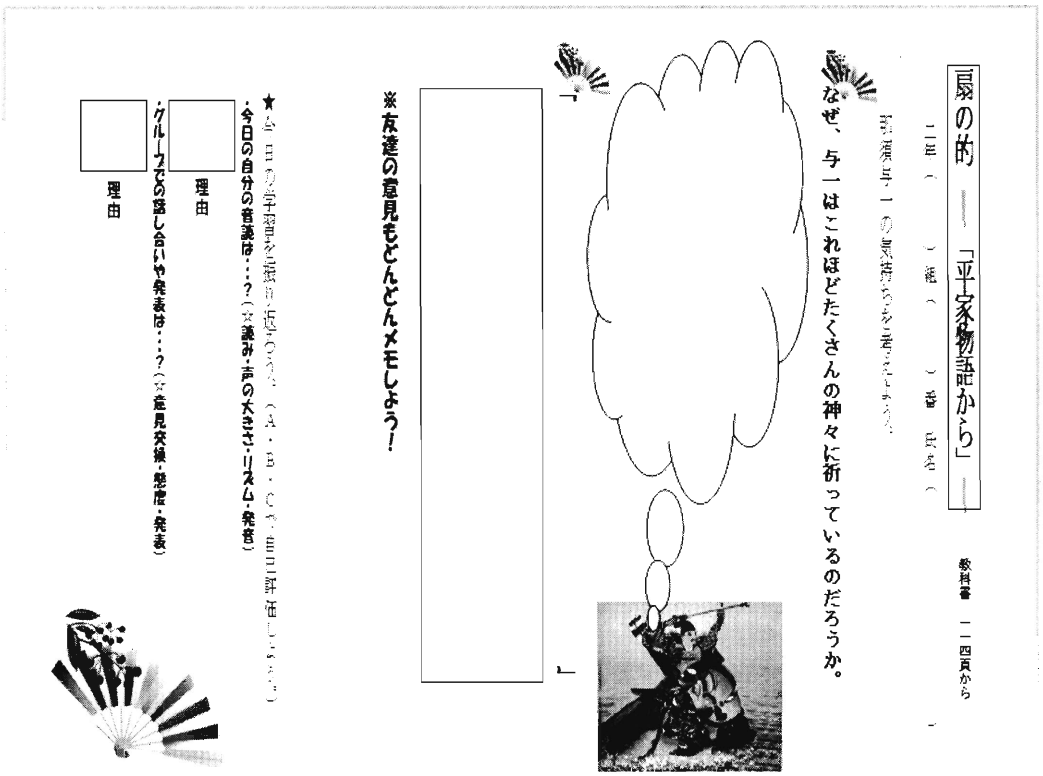
2 平家物語の授業構想

これらの手立てをふまえ、実践した平家物語の授業の流れを以下に示す。

（図表 4）　扇の的ー「平家物語から」ー 授業の流れ

時間	主な学習内容	教師の支援
1〜2	①古文の読みにおける基礎知識を振り返る。特に歴史的仮名遣いの読み方を中心に。	①第一学年での既習事項を振り返り、古文を読む際の抵抗感をなくす。
	②歴史的仮名遣いの小テスト 50 問を行う。	② 歴史的仮名遣いの原則を理解して、歴史的仮名遣いが読めているかどうかの確認をし、現時点での自分の力を把握させる。
	③順番に読みの理由を説明しながら小テストの答え合わせをする。	③自分で説明したり、他の生徒の説明を聞いたりしながら確認することで、繰り返し歴史的仮名遣いの原則について学ばせる。
3	①時代背景の知識を、自ら調べ発表する。	①一方的な知識注入をせず、時代背景の知識を自由に調べ、発表させることで、生徒の発言意欲を向上させる。 発表した意見をできるだけ板書し、価値付ける。
4〜5	①現代語訳を読み、教科書や便覧の写真や絵を見ながら、あらすじや状況設定、登場人物などの確認をする。	①古文を読む際に、それぞれの場面の想像や人物の気持ちを理解させる。
	②音読練習 （段階Ⅰ→Ⅱ）	②様々な方法で音読することで、楽しく音読できる。グループ毎に読みを聞き合い、読みの振り返りをさせる。
6〜8	①中心人物の心情に迫り、グループ内での話し合いや、学級全体での意見交換をする。	①相手の意見を聞き合い、まとめる力を身につける。
	②音読練習 （段階Ⅱ→Ⅲ）	②一人でも自信を持って音読したり、心情を込めて音読したりできるようにする。

（図表 5）那須与一の心情に迫った時に使用した学習シート


扇の的 ―「平家物語から」―
教科書 一一四頁から
なぜ、与一はこれほどたくさんの神々に祈っているのだろうか。
※友達の意見もどんどんメモしよう！
★今日の学習を通して思ったこと（よ・ま・ち・ち・ま・ち・ま・ち・ま

3 本音で発言できる良好な学習集団づくり

授業での発言力を高めるためには、日頃から学級で良好な集団づくりをしていくことが必要である。たとえ教師が、的確な発問をしたとしても、生徒にに他者の意見を受け入れようとする姿勢・態度が育っていなければ、発言する意欲はわきにくい。

(1) スピーチ活動を取り入れた学級づくり

本音で発言していくためには生徒ひとりひとりが、互いのことについて知り、認め合っていくことが大切である。2年1組学級では朝の会で一分間スピーチが行われており、次の工夫がなされていた。

①テーマは生徒が中心となって決めることができる。

4月当初のみ、自己紹介というテーマで行なったが、その後のテーマについては中学2年生という発達段階を考慮し、級長・副級長を中心にテーマ決めを進行させる。

自分たちで決めたテーマであるため、意欲をもって1分間スピーチを行うことができる。教師は、一人ひとりがしっかりと話し合いに参加しようとしているかをチェック・指導したり、1分間スピーチを行う意義として、「受験の際に必要な力を今のうちから練習しておく。」や「決められた時間で相手に説明することは、社会に出てからとても大切である。」などの理由を生徒たちに説明したりし、学級全体が前向きに活動できるよう支援をする。

②スピーチ内容をメモした紙を見ながら発表しても良い

メモを見ずに、1分間完璧にスピーチするというよりかは、穏やかな雰囲気でスピーチをする、そして周りは相手の話に耳を傾けられるかに重点を置く。日によっては、発表者の話をしっかりと聞けていない時がある。そういった時には「自分の話を無視されたら、どう感じるか?」などの指導を行い、他者を尊重する気持ちを高める。メモに関しては、発達段階や時期を考慮して、そろそろメモを見ないで発表してみようという雰囲気を学級全体に漂わせていく。例えば、メモを見ずに教室全体を見渡しながら発表しようと頑張る者がいれば、そういった生徒の姿勢をしっかりと全体の場で評価し、他の生徒の意欲を高める。毎日のことなので、その日の生徒や学級の状態を把握しながら行うことが大切である。

③発表の後には達成感を味わえるように

一人ひとりの発表のなかで、できる限り良かった点や改善すべき点を教師から伝えるようにする。時間がなく、朝の会で十分に伝えられなかった場合などは、生活ノートの朱書きなどで一言伝えるなどのフォローを行う。

(図表6) スピーチ後の声かけの一例

	生徒への一言　具体例
生徒1	具体的な場所を紹介し詳しく話せていた。全体には「具体的な名前や地名があることで、より興味を持って聞けるよね。」と伝えた。
生徒2	緊張せず、ゆっくりと話せていて聞きやすい。全体には、毎日一人ひとりのスピーチから良い部分を見つけて真似していけると良い。と伝えた。

④発表後に、拍手をする。

前に出て1分間スピーチをした生徒に対して拍手を行う。教師が何気なく自然と拍手をすることで、周りの生徒も拍手をするようになる。発表の後に拍手があるだけで、教室全体の雰囲気が暖かくなる。教師が拍手をしなくとも、生徒から率先して自然に拍手が出るようになれば、それは学級が良い方向に向かっている証拠ではないだろうか。

このようにスピーチ活動では（ア）から（エ）のような、緊張感なく暖かい雰囲気で生徒が発表しやすい環境づくりを日頃から整えていくことが非常に重要である。

(2) 教師と子どもの信頼関係づくり

①日常生活における声かけ

生徒とより良い関係をつくるにはどうしたら良いか。日常からできるだけ、何気ない会話を生徒とすることが大切であることを学んだ。何気ないというのは、今日の天気だとか、昨日どんなテレビを見たかなど、生徒にとって答えやすい内容のことである。そういった気楽な会話を少しずつ積み重ねることが大切である。また、あまりダラダラと話さず、何気なく会話をはじめ短時間で終わらせると、生徒も会話がしやすい。給食の時間や掃除の時間は生徒と特に関わることのできる機会である。特に掃除の時間に生徒が見せる表情は、授業や部活の時とはまた違う表情で、ふと本音で話し合える時間でもあることを知った。

②生活ノートを通した朱書き

毎日、生徒がその日のことについて書き、それに対して朱書きをするという生活ノートが実習校では行われていた。実習中は、そのノートに朱書きをさせていただく機会をいただいていた。生徒が書いてくる内容はさまざまで、文量も1行か2行程度という者から、5行以上書いてくる者まで個人差が非常にあった。生活ノートの朱書きから次のことを学んだ。

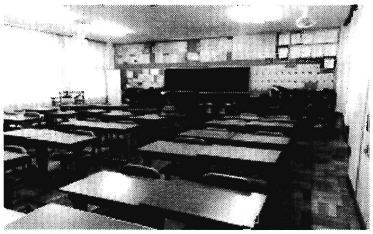
（ア）生徒の今の状況に敏感になる機会を与えてくれる。例えば、ある生徒が急に文量が減ったり、文字が乱雑になったりなどした場合はその生徒の様子を見守ったり、指導や支援を行う必要がある。

（イ）生徒が書いてくる内容以外にも教師が積極的に朱書きをしていくことで、より良い関係づくりにつながる可能性がある。例えば、ある生徒が課題をいつもよりも頑張って行っていたり、1分間スピーチの内容が良かったりした時などは、その姿について認めるような一言を書き足すことも大切である。生徒のなかには、「今日はあまり発言できなかったけど、明日は頑張りたい。」などのコメントを書く者もおり、授業への意欲付けとしても大切である。

(3) 教室環境の整備

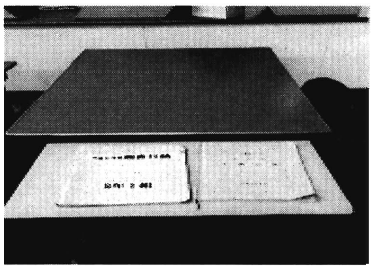
教室の環境整備は、生徒の気持ちに影響する。学級の学習意欲を向上させる上で非常に重要である。主なポイントを以下に示す。

写真 1 整然とした教室



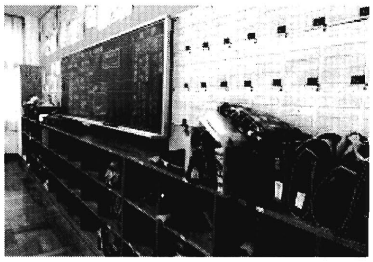
机の横にものをかけたり、置いたりしない。手さげかばんや、筆記用具などを机の横にかけたり、置いたりしないように指導する。授業中の集中力を高める効果と同時に、生徒それぞれが意識し、守ろうとする自治の姿勢を身に付けさせる。

写真 2 整頓された教師机



毎日の課題チェックや、集配物など、どうしても机の上に置かなければならない物以外は、常に整理整頓しておく。教師用の机は教室で何気なく目がいきがちである。

写真 3 ルールの守られたロッカー使用



かばんの紐などがはみだしていないかなどを朝の読書タイムなどの時間を利用してチェックする。必ず生徒に注意をし、生徒自身に直させるようにする。

教室の環境整備は、段階的な指導を通して継続的に指導することが大切である。単に教室を綺麗にするだけでなく、生徒自身が考え、動き、学級を作っていけるルールが存在すると、次第に学級も良い状態になっていく。

V 実践の考察 -発言力を引き出す発問-

実践を通して、ねらいの定まった発問をすることの難しさを感じた。発言力を引き出すには的確な発問が必要である。そのためにはそれぞれの学級の実態に合わせた発問を考える必要がある。その際に次の 3 項目を事前に準備しておくと効率的である。

1	発言内容や、学習シートでの各生徒の解答や姿勢を把握する。
2	発言内容や気になった生徒の姿勢をメモできる座席表を作成し、記録しておくと、その後の授業展開に役立つ。
3	新しい単元に入る前には、事前にアンケートをとり、それぞれの生徒の学習状況を把握しておく。

1 身近な出来事を例に、生徒が考えやすい雰囲気をつくる。

各単元の状況把握や登場人物の心情把握が生徒に伝わりにくい場合は、生徒の日常生活に置き換えて説明できるように工夫する。特に、古典の授業の際には日常生活から非常にかけ離れた内容であり、生徒からすればとっつきにくく、自分のなかで整理することが難しいことが多かった。たとえば、『扇の的ー「平家物語からー」光村図書 (2 年)』では、弓の名手である那須与一が、必ず的を射なければいけないという、緊迫したシーンがあるが、授業中にその緊迫感を自分のことのように想像することは難しい。身近なことを例に伝えると生徒の反応も良くなる。

(図表 7) 日常生活への置き換え　具体例

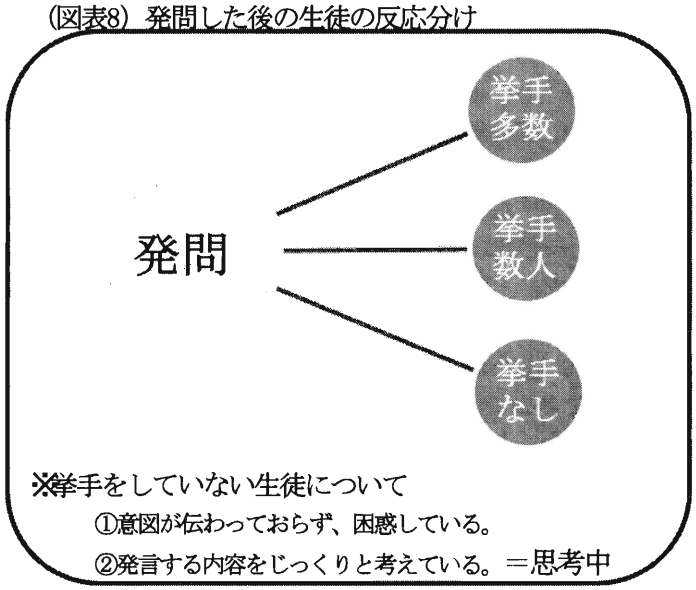
教科書の内容	身近な例に置き換える
那須与一と、船にある扇の的までおよそ 72 メートルの距離がある。	校庭にある 50 メートルプールよりも遠い。一発で自分はその距離に当てられるか?
的をもしも、外した場合、那須与一自身の命はおろか、一族全体にも危険が及ぶ。	部活の試合で、シュートを外したら、自分の命はおろか家族の命も危ない。冷静にシュートできるか?

このように、日常生活で身近なものや部活動などに置き換えたり、普段生徒の間で流行っていることなどを把握して置き換えたりすると生徒も状況を把握しやすい。

2 発問をした後の対応について

発問後の、生徒の反応をじっくりと観察する姿勢を身に付けなければいけない。発問をした後の生徒の反応には、主に「多数の挙手」「数人の挙手」「挙手なし」があった。この時、挙手をしていない生徒のなかには、発問の意味がわからず困っている場合と自分の考えをまとめるのに時間がかかっている場合があるので、よく観察しなければならない。

(図表8) 発問した後の生徒の反応分け



以下、それぞれについてまとめた。

◆挙手が多数の場合

多くの生徒が発問の意味を理解し、答えようとしている状況。授業の筋道を考えながら、それぞれの生徒の日頃の考え方を参考にしたり、事前に机間指導をしているならばその時の内容を参考にしたりして指名していく。

◆挙手が数人の場合

すぐには指名せず、周りの生徒に呼びかけたり積極的に指名したりする。すぐに指名をすると、毎回決まった生徒だけで話し合いが進んでいってしまう。他の生徒はただ話を聞くという受身の姿勢になってしまい、学ぶ意欲が低下する。

◆挙手なしの場合

生徒の様子を確認しながら、発問の内容が悪かったのか、生徒が思考中なのかを判断する。この時に発問をわかりやすく伝えようとして、何度も言い直すことは逆効果である。違う言葉で言い直せば、生徒はさらに混乱してしまうことが多い。率直に「今の発問の意味はわかった？」「何がわからい？」など正直に生徒に聞くことが最も良い。また、生徒の発言だけが学習の成果ではない。沈黙し考えている時間にも着目し大切にしていきたい。

3 一問一答から一問多答へ

生徒の発言を広げ、活発な意見交換をするためには、生徒が発信した内容を教師が意図的に、学級全体に広める意識をもたなければならない。「〇〇だと思います。」という生徒の意見に対して、「～さんは〇〇だと考えたようです。みなさんはどうですか？」と生徒から生徒へ橋渡しのような言葉がけを行い、一問多答の状態を意識することが必要である。生徒の意見を学級全体に広げる声かけの具体例を以下に示す。

(図表8) 生徒の意見を学級全体に広げる方法例

「同じような意見でも良いです。発表しましょう。」 同じ意見の言い合いになっても良い。生徒同士がお互いに意見交換しようとする姿勢のきっかけとなる声かけ。
「続けてどうですか。」**の後の心構え。** 「待ちの姿勢」をもつ。すぐには指名しない。すぐに指名してしまうと、限られた生徒の間だけでの意見交換になってしまい、他の生徒の学習意欲を低下させてしまう。そうならないように、生徒にじっくりと考えさせる。この時、「他にありますか？」は避ける。今考えている内容について、「もう言ってはいけないのかな？」、「他のことを聞いているのかな？」と生徒に誤解を与えてしまう。
「今の内容を、自分で説明できますか？」 別の生徒にもあえて説明させる。一人ひとりの生徒が授業に参加できるようにするため。ただし、学級の実態に合わせて、何を、どこまで説明させるかは考えなければいけない。簡単な内容を何度も復唱させたり、逆に難しい内容を無理に復唱させたりしないように気をつけたい。

Ⅵ 成果と今後の課題

1 実践で行った手立ての成果と課題

(以下成果を◎、課題を▲で表す。)

(1) 基礎知識の理解 授業構想への位置づけ

◎生徒が抱える古文学習の課題が明確化した。

▲基礎学習の時間が十分でなかった。

アンケート調査を行い、生徒がどういった部分に苦手意識や嫌悪感をもっているのかを把握しておくと、授業構想をより的確に考えることができる。本実践では、古文を読めないことで、つまずいてしまい嫌悪感を持つ生徒が多いことがわかった。

古文の基礎知識についての発問をした際に、生徒らは1年前の学習内容ということもあって、プリントを見ずに自信をもって発言できる生徒はほぼいなかった。去年使ったプリントに内容が書かれていることを伝え、プリントで答えを探しながらであれば、積極的に発言できる生徒が大半だった。

今回はこの基礎知識の習得にあてる時間が十分ではなかったと感じている。そのため、第1学年から古文を得意としている生徒や、もともと学力の高い生徒を中心に進行していく場面が多かった。今後は、他の単元においてもこのような調査を行いながら、基礎知識の習得にかける時間を充実させたい。

(2) 音読指導の工夫について

◎生徒の音読練習の仕方を段階毎に行なったことで、全体での音読練習を停滞せずに行うことができた。

▲生徒一人ひとりが音読し、その読みを批評し合う段階まで到達できなかった。

全体やグループ毎での、音読練習に時間をかけすぎてしまい、個人での音読を聞き合うという活動ができなかった。今後は個人読みの発表を通して互いの良い部分や改善点を見つけ合う活動もしていきたい。また、グループ毎に登場人物を演じながら音読したり、群読発表などを取り入れるなどして、音読を楽しめるような工夫もしたい。

(3) 時代背景の理解を通した学習意欲の高まり

◎意欲的に辞書や便覧で調べ、発言しようとする生徒がいた。

▲生徒の発表にうまく対応できず、わかりやすく板書をまとめられなかった。

『平家物語』について調べてきたことや見つけてきたことを自由に発表するという場面において、学習意欲や発言意欲の高まりを感じた。なかなか発言できない生徒でも、「作者についてわかる人」などの一言を付け足すことで、挙手できる生徒もいた。しかし、生徒からの様々な発表を項目ごとに板書できず、振り返りにくい板書内容になってしまい、うまく価値づけられなかった生徒もいた。今後は、あらかじめ項目ごとに板書する場所を決

めておき、生徒からの予想外の発言にも落ち着いて、対応し価値づけていきたい。

(4) 良好な学習集団づくりが授業にもたらす効果

◎グループ活動の際に協力的な姿勢がみられた。

グループ活動や他者の意見に耳を傾ける姿勢が身についている生徒が多かった。また日頃からの自治活動をとおして、グループでの話し合いの際に、意欲的に意見をまとめようとする生徒が何人かいた。

(5) 振り返りシートから見える子どもの学びの変化

◎繰り返し音読の練習をすることで、生徒の音読に対する自信が上がった。

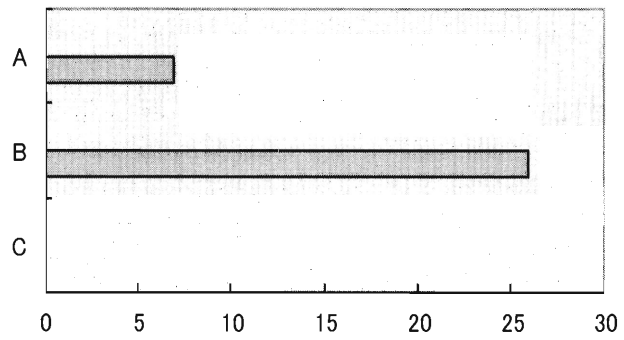
◎音読に対する自分の課題について、細かく見つめる生徒がいた。

▲グループでの話し合いを学級全体に生かすことができなかった。

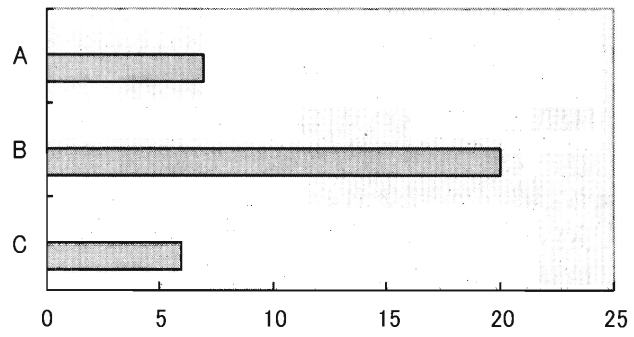
学習の振り返りとして、生徒に**音読について**と**グループでの話し合い・授業での発表について**の 2 つの設問をABC の段階で自己評価させた。

(対象2年1組 男子 15 名 女子 18 名 合計 33 名)

◆音読について (読み・声の大きさ・リズム・発音)
生徒の自己評価 (A 7名 B 26名C 0名)



◆グループでの話し合いや発表について
生徒の自己評価 (A 7名B 20名C 6名)



振り返りシートからわかる生徒の様子

①音読に関して

(ア) 音読では、自己評価を B とする意見が全体の 75%で非常に多かった。一方で、自己評価を C とする生徒がいなかったことは、少なくとも音読に対して生徒それぞれが成長を感じていることを示しているのではないだろうか。自己評価を B とした生徒の大半が、自分の読みのどこが不十分だったかを書いており、振り返ろうとする姿勢を感じた。

(イ) 毎時間、練習をしていたことで、細かい部分にまで目を向けられるようになった生徒がいた。

生徒1 (自己評価A) のコメント 「射させてたばせたまえの部分をしっかりと読めた。」
生徒2 (自己評価B) のコメント 「自分は、サ行でいつもつまずいてしまう。」
生徒3 (自己評価B) のコメント 「声は出したし、途中でつまったりしなかったけど、リズムが惜しかった。」

(ウ) 暗唱をして音読練習を頑張っていた生徒がいた。

生徒4 (自己評価B) のコメント 「暗記していたのに読み間違えたし、声の大きさも普通だったから。」

②話し合いや発表に関して

(ア) グループでの話し合いや発表では、自己評価Bが全体の60%、自己評価Cが全体の18%で、自信をもってAをつけられなかった生徒が全体の78%であった。自己評価にBやCをつけた生徒のなかには「グループ内での話し合いはできたが、授業では発表できなかったから。」といった意見や、「話し合いのはじめは意見が言えなかったが、後から言えた。」といった意見、他にも「話し合いをうまくまとめられなかったから。」と、自己評価をAとする生徒よりも厳しめに評価をつけている生徒もいた。本実践では、グループ内では自由に発言できても、授業全体ではなかなか発言できない生徒が多かった。

(イ) 発言の少ない生徒が意見を発表したことによって達成感を得たコメントを残していた。

生徒5 (自己評価B) 「先生にあてられてびっくりしたけど、思っていることが言えてよかった。」

生徒 5 は、どちらかといえば学力は高くなく、授業中の発言回数も多くない。しかし、机間指導をした際に学習シートに自分の意見をしっかりと書いていた。今後も生徒 5 のような生徒が、発言することの喜びや達成感を感じ、学習に意欲的になれるきっかけをつくっていきたい。

2 今後の課題

(1) 他教科とのつながりや、日常生活とのつながりのある授業構想をする。

今回の実践では、あくまでも『平家物語』という世界観の中での学習しかできなかった。

しかし、古文には、昔の人々の生活の様子やものの価値観など現代と比較できる対象が多い。今後は

これらの良さを通して、他の国の昔話や他国の人々の暮らしや価値観などについても迫っていけるようなより視野の広い授業構想をし、児童生徒がさらに、興味・関心をもって学習に取り組めるようにしたい。

(2) 音読を中心に小学校からの系統的な学習を目指す。

基礎的な学習を小学校の段階から系統的に行なっていくことで、中学校段階では古文に対して嫌悪感を抱かないようにしたい。児童の多くは昔話が好きである。その気持ちを抱いたまま、中学校段階でも、楽しく学習できるように、小学校での系統的な授業構想をしていきたい。

(3) これまでの学びの振り返りを積極的に行いながら授業を進める。

学習内容が共通する昨年度の単元内容を思い出させたり、3 年間を通して同じ資料やプリントを使えるようにしたりする工夫や指導をすることは、生徒の学習をより明確なものにすることを学んだ。自分自身の学びの歩みを直接振り返ることができるからである。今回の実践を通しても、特に古文はその振り返りや積み重ねが大事であると感じた。全体を見通し、生徒が振り返りやすい工夫をしていきたい。

(4) 発言回数を継続的に記録し、より具体的な支援を目指す。

児童生徒の発言回数や内容を継続的に記録し、それぞれの学習に対する意欲の変化をより具体的な形で考察していきたい。本実践では、学級全体への支援が多く、生徒それぞれへの支援まで行うことができなかった。今後は、児童生徒のそれぞれの成長を記録、見守りながら、より良い実践を行っていきたい。

Ⅶ おわりに

小学校免許取得コースを含め、大学院での 3 年間の学びのなかで、様々な児童や生徒と関わってきた。この 3 年間の学びを振り返り、生かしながら、これからも児童生徒が意欲的に授業に参加し、活発に意見を出し合える授業を今後も目指していきたい。

【付記】大学院 2 年間の実習は、以下の学校でさせて頂いた。

＜学校サポーター＞＜教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ＞

みよし市立三好中学校（青木康次校長先生）

＜特別課題実習＞

豊田市立東保見小学校（新美隆一校長先生）

＜教師力向上実習Ⅲ＞

みよし市立三吉小学校（太田予一校長先生）

実習中は多くの先生方にご指導ご助言を頂きました。本来ならば、お一人ずつお名前をあげるべきですが、ここでは省かせていただきます。お世話になったすべての先生方に、心から感謝申し上げます。サポーター実習や、向上実習で学んだこと、教えていただいたことを糧にして今後の教育に取り組んで参ります。

最後になりましたが、学校サポーターにてご指導をいただきました山田久義先生、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでの実践を進めるにあたりご指導をいただきました白井正康先生・佐藤洋一先生、修了報告書作成の際にご指導をいただきました白井正康先生に心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

【注記】

注 1 蔭山江梨子「日本文化・思考の型を楽しく―『平家物語』『扇の的』を例に―」（『教育科学 国語教育 2 月号』 明治図書 2011）

【参考文献】

1 新学習指導要領関係

(1)文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』（東洋館出版社 2008.8）

(2)文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』（東洋館出版社 2008.8）

(3)文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』（ぎょうせい 2008.9）

(4)文部科学省『中学校学習指導要領解説 国語編』（ぎょうせい 2008.9）

2 国語科関連

(1)田中洋一編著『中学校国語科 新しい教材と視点で創る古典の授業 伝統的な言語文化の享受と継承』（東洋館出版社 2010）

(2)田中洋一著『中学校国語科 新学習指導要領詳解ハンドブック』（東洋館出版社 2009）

(3)植西浩一『中学校新国語科の展開 1 活用型の国語科授業づくり 中学校編』（明治図書 2009）

(4)佐藤洋一「戦後教育の時代は終わった―伝統的な言語文化重視―」（『現代教育科学 11 月号 』 明治図書 2011）

(5)佐藤洋一『光村図書「伝統的な言語文化」のテキスト形式を生かす』（『教育科学 国語教育 1 月号』 明治図書 2012）

(6)左近妙子「古典で身に付けさせたい国語学力」（『教育科学 国語教育 5 月臨時増刊』 明治図書 2009）

(7)川合康編著『歴史と古典 平家物語を読む』（吉川弘文館 2009）